

教 職 の 魅 力

副学長 毛 内 嘉 威

ベネッセ教育総合研究所による調査では、「教職の魅力」について、教員の9割が「子どもと喜怒哀楽を共にできる」「子どもと共に成長できる」とし、この他に「将来にわたって子どもの成長に関われる」「社会を支える人を育てることができる」が挙げられています。教職の魅力は、仕事を通して子どもと関わり、その子どもの成長に尽くすこと、教員が子どもの成長に関わり、教師と子どもが共に成長できることです。

日本の教育は、明治期の学制の施行以来、国民の高い熱意と関係者の努力に支えられながら、国民の知的水準を高め、社会の発展の基盤として大きな役割を果たしてきました。特に、資源もない小さな島国の日本が、経済発展を遂げ、高い生活水準を維持できているのは、質の高い教師による教育が展開されてきたからだと考えています。今後の日本の発展に寄与できる人づくりに参画できる面白さが、教職の魅力と言えます。

教育は、人格の完成を目指し、個性を尊重しつつ個人の能力を伸張し、自立した人間を育て、幸福な生涯

を実現する上で不可欠なものです。同時に、教育は、国家や社会の形成者たる国民を育成するという使命を担うものであり、人類の歴史の中で継承されてきた文化・文明を次代に伝え、更に発展させていきます。

本学の理念の一つに「新しい芸術領域の創造」があります。これは、地域資源や地域課題に向き合い、様々な社会情勢に対応できる人材を育成することです。本学で育成しようとする資質・能力は、教員の資質能力としても必要不可欠なものです。

本学の教職課程は11年目になりますが、これまでに教員免許状を取得した学生が日本全国に教員として旅立ち、そこで素晴らしい教育を展開しています。私たちは、学生と一緒に魅力ある教職課程の基礎を作り出してきました。新しい芸術領域の創造と教職課程に果敢に挑み、研究してくれた学生たちを誇りに思っています。また、芸術と教職の学びを両立させて日々励んでいる学生の皆様を大変誇りに思っています。

教師のなり手不足の中で

「**あ**すに**き**きぼうの**た**ねをまく」（秋田）、「先生と児童・生徒の特別なシーンがある」（兵庫）、「Face to Face それは、向き合うことから始まる」（岩手）、「育てるのは、東京の未来だ。働き方改革進行中！」、「個性が生きる現場で」（茨城）…。

本年度の公立学校教員の募集案内に記された言葉たちです。キャッチコピーとしての評価は、美大生である皆さんにお任せするとしても、これらのフレーズには、教師のなり手不足を払拭したいとの切実な思いが感じられます。

1年ほど前、日本若者協議会（一社）が実施した「教員志望者減少に関する学生向けアンケート結果」によれば、減っている理由として最も多かったのは、「長時間労働など過酷な環境」で94%でした。次いで「部活顧問など本業以外の業務が多い」が77%、「待遇が良くない」が67%などとなっています。近年、教員の労働環境がクローズアップされ、“やりがい搾取”や“ブラック部活動”といったキャッチーな言葉で取り上げられるようになってきたことと無関係ではないでしょう。

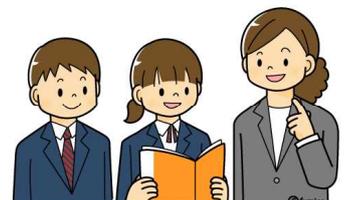
それでも、教職課程に関心を抱いてくれた皆さんに

は、教職の魅力や面白さをぜひとも味わってほしいと願っています。

この春入学した皆さんが、「教職入門」に先立って実施した意識調査の中で、「好きな先生や尊敬する先生がいる」と、全員が肯定的に回答してくれたことは、教職の魅力を示す一つの証左と言えないでしょうか。これまでの学校生活において、誰もが、自分を導き理解してくれる存在、自分の生き方に影響を与えてくれた存在に出会えたことを物語っているように感じます。

子どもたちの成長を肌で感じ、自らも成長できるばかりでなく、学び舎を巣立った後も、直接、間接を問わず、お互いに人としての関わりを持ち続けられることが教職の魅力の一つです。

本年度も、本学第六の“人づくり専攻”（野々口先生）として、教職課程の先生方とともに、教職支援室を挙げて、皆さんの学びを支えています。



各学年の一年間の取組

1年生

学生数：30名

3月に17名の4年生が卒業して幾分寂しくなった教職課程でしたが、フレッシュな30名の新入生が加入して、また賑やかさが戻ってきました。

その1年生が現在取り組んでいるのが「教職入門」。これは、「教職の魅力とは？」と「美術教育の意義とは？」の2つのテーマを追求すべく、秋田市立日新小学校での実習と秋田公立美術大学附属高等学院での実習をメインとした科目です。現在は、5月30日(火)に迫った日新小学校での実習に向けて、充実した実習になるよう諸準備に取り組んでいるところです。

後期になると、前期の学習を踏まえて、いよいよ中学校現場での体験をメインとした「学校体験実習1」の授業が始まります。会場は、本学の隣にある秋田市立秋田西中学校。ここでは、生徒たちの登校を温かく迎える先生方の朝の様子、職員の打合せ、授業の様子はもちろん休み時間中の先生方の動きまで、教師の仕事について半日じっくり観察する内容になっています。



R4 日新小での実習の様子

2年生

学生数：35名

2年生は履修生が最多の学年で、後期に実施される「学校体験実習2」は、実習校を中・高各1校ずつ増やして中学校2校、高校2校に行う予定です。

ところで、2年生の教職課程で最も大事なことは、修得すべき科目の単位を確実にとり、3年生で教育実習ができるようにすることです。4月18日の教職課程ガイダンスでも説明しましたが、あらためて、3年生で教育実習を実施できる条件を示しておきます。

- 1 原則として、2年生まで修得すべき「教職に関する科目」の単位を修得済みの者
- 2 原則として、「教科に関する科目」の単位を十分に修得している者

ただ、2年生になると大学生活にすっかり慣れ、1年生の頃よりも緊張感が薄れがちになるものです。油断せず、一つ一つの授業にしっかり出席し、教員として必要な力をしっかり身に付けて、来年度の教育実習に臨んで欲しいと願っています。



R4 外旭川中での授業実践の様子

3年生

学生数：21名

3年生21名のうち、今年度教育実習に取り組む予定の学生は15名(他の6名は来年度実施予定)です。1・2年生の授業や実習で身に付けた知識や経験、また特任教授との個人面談を含む「教育実習事前指導」で学んだことを生かして、自信をもって教育実習に取り組んでほしいと願っています。実習校の先生方が実習生に期待しているのは、ベテラン教師のような上手な授業ではありません。実習を通してより多くのことを学びたいという積極的な姿勢と、生徒たちと真正面から向き合おうとする真摯な態度です。15名の教育実習生一人一人の健闘を心から願っています。そして、願わくば、「絶対に教師になりたい！」という思いを強くして、教育実習から帰ってきてほしいものです。

教育実習終了後は、特任教授との個人面談形式による「教育実習事後指導」を受けながら、10月2日(月)と12月4日(月)の「教育実習報告会」の発表準備を進めていきます。



R4 高校での教育実習の様子

4年生

学生数：22名

教育実習を終えた4年生が取り組む科目は、後期の「教職実践演習」ただ一つ。これは、教育実習の期間では学ぶことができなかった内容や喫緊の教育課題への対応などが主な学習内容で、2コマ連続(計180分)の授業となっています。また、卒業後すぐに教員となった場合でも困らないよう、教育現場をよく知る専門家を講師として招いたり、就職して間もない年の近い先輩たちから話を聞くことができるなど、臨場感のある授業づくりにも配慮しています。

後期の授業が始まる頃は、教職以外の道に進むことに決定して、すでに企業から就職の内定をもらっている学生もいることでしょう。ですから、そのような教職に就かない学生にとっても役立つ内容になるよう工夫していきます。

教職課程最後の科目にしっかり臨み、有終の美を飾ってほしいと願っています。



R4「教職実践演習」の様子

教育実習関連科目担当スタッフの自己紹介



毛内嘉威（もうない よしたけ）です。趣味はスキーと弓道、そして旅です。秋田に来てからはスキーも弓道もかなり遠ざかっています。今年こそは、山スキーも弓道も復活したいと思っておりますが、体力も気力もなくなっているのが現実です。

大学は農学部農芸化学科出身ですが、現在の専門は、道徳教育・教育方法となっています。大学卒業後、紆余曲折を経て、通信教育学部に入り直し、小学校教員免許状などを取得し教員になりました。教員になってから、昔から興味関心のあった倫理・哲学・道徳教育という分野の研究にのめり込み、現在に至っています。得意でなくても、好きなことは困難とも思わず続けられるものだと、今になって思っています。



野々口浩幸（ののぐち ひろゆき）です。本学に奉職して6年目になります。出身は青森県八戸市です。もともと青森県の高校教員として社会科（専門は日本史）を教え、部活動は陸上競技部と硬式テニス部の顧問をしていました。教職課程の講義では、理論だけでは

なく自らの実践、経験、想いを伝えるとともに、教員としてだけではなく、人間として成長し生きていくために役立つ内容にしていきたいと考えています。教職課程は「人づくり」専攻です。

人は1人では生きていけませんし、人は幸せになるために生まれてきたのです。自分を大切に、人を大切に生きていく。その基礎やヒントになるものを見つけてほしいと考えています。応援しています。



尾澤勇（おざわ いさむ）です。美術科教育、工芸科教育、工芸演習Aを担当しています。東京都出身で、都内と広島県の中学校、高等学校教諭を経て美大開学と同時に赴任しました。大学院修了後、美術や工芸の教育に

携わりながら金属工芸の作品出品を行ってきました。自らも制作活動を行うことで常に第一線で明日の工芸を創りだし、その成果を生徒に還元し、生徒と共につくり手の目線でお互いに成長することを大切にしてきました。五感を通した教育の復権とフィンランドとの交流を通した教育の研究をテーマとして取り組んでいます。地域の食材を使った料理などもよく作ります。今日、AI全盛の時代だからこそ、益々、芸術による感性や創造性を育む重要性が叫ばれています。皆さんと共に取り組み成長していきたいと思っております。



大関智子（おおぜき ともこ）です。教職課程では実技系の演習科目を担当します。自身の専門分野は日本画で、作品制作の他、地域資料保護のための調査・研究も行なっています。最近、制作のために植物の「ロゼット」について調べています。「ロゼット」とは、越冬草に見られる越冬するための形態のことを指します。冬の時期、草花は風雪で自身の体がダメージを受けないよう地面に放射状に葉を広げ、さらに地面の熱で葉を温めながら賢く過ごします。コロナ禍の生活から少しずつ日常を取り戻しつつある今日この頃、3年間越冬した皆さんは何かしらの栄養を蓄え、エネルギーに満ち溢れた人も多いでしょう。大輪の立派な花を咲かせなくとも構いません、皆さんの1年後が自分の成長を実感できる充実した1年になるよう願っています。



齋藤透（さいとう とおる）です。本学勤務3年目で、教育実習関連科目と教養科目「日本史」を担当しています。ところで、私は美大勤務の前は中学校教員で、ふり返ると学級担任や部活動の顧問として、生徒たちと毎日ワイワイガヤガヤやっていた頃が一番充実していたように思います。確かに教員は給料が特に高いわけではありませんし、苦勞も多い職業です。でも、生徒たちとの生活の中には、教員でなければ味わえない感動がたくさんあるのです。湧き上がる喜びや達成感、悔しさ……そんな感動の連続こそが、教員の最大の魅力です。授業を通じて、本気で教職を目指したいと思う学生が1人でも増えるよう心から願っています。



山脇聡（やまわき さとし）です。ふと40年程前の書籍をめくれば古いのごとく「今」を言い当てている。例えば、IBMのバックスが1954年にFORmulaを發明、改良し、スパコンに不可欠な言語にした時、報酬として会社は彼に白紙小切手を渡したし、彼は会社組織では新発想が孵化しないと山中に暮らし必要時のみ出社した。「今」のジョブ型雇用とテレワークの先取りだ。次に彼は異分野交流なしには新機軸が生まれないと、再び街で異分野と接し始めた。これは強い紐帯より、創発型（Emergence）の能力や発想を組み合わせる創造的な成果を求める「今」のWeak ties論そのものだ。美大で教職というやや違った空気感に浮遊する体験が芸術性を高め、将来が「今」に誘発されることを願う。Education Loves Art.

教育実習関連科目担当スタッフの自己紹介



渡部克宏 (わたなべ たかひろ) です。かつて、教育実習にきた大学生たちに、教師の離職率はどのくらいだと思います？と聞いたところ、3割ぐらいかな、と答えが返ってきました。ブラックな仕事だからという理由でした。しかし実際には教師の離職率は極めて低く、全職種の中でも最も低い方に位置しています。辞めても他にやれることがない、安定した職業だから等の理由も考えられます。しかし、これだけ世間が好ましくない評価をしているのに離職率が低いのは、先生方が、教職に大きな充実感や手応えを感じているからではないでしょうか。イメージに流されることなく、一人でも多くの人が教師のやりがい・魅力を理解し、教師の道を志してほしいと願っています。



嶋崎公人 (しまざき きみひと) です。歴史小説やミステリー小説が好きです。本には一気に読み終えてしまうものもあれば、伏線や人物描写が難解で読み進めるのに苦労するものもあります。自分の思い描いた筋書き通りに話が進み気分がよくなる本もあれば、予測しない展開に歯痒さを感じさせる本もあります。昔は、読みやすい本が好きでしたが、この頃は読み進めるのに苦労する本、意外な展開となる本もいいなと思うようになりました。読み切った後に成就感や満足感を味わうことができるからです。教職を目指す道のり、教員免許を取得する過程にも同じことが言えるかもしれません。思い通りにならない苦労や困難があっても、やりきることが大切です。応援します。



加賀谷亨 (かがや とおる) です。世界で最も古い木造建築、法隆寺の五重塔が建立されて1,300年以上、その間、マグニチュード7.0以上の地震を46回も経験しているのだそうです。ところが、倒れたという記録は残されていません。では、五重塔がすごく頑丈な造りになっているかというと、そうではありません。簡単に言うと、非常に「揺れやすい」構造になっているのだとか。人間も同じだと思いませんか。悩んだり、迷ったりして、いつも心が揺れ動いているの方が、案外強いものです。あれこれ気にして、いろいろ思い悩む人は、「自分は揺れながら安定して、実際には、それが一番強いのだ」と考えるようにしませんか。

ここ秋田を創造と発信、そして学びのフィールドに選んだ皆さんを精一杯応援します。



阿部ゆかり (あべ ゆかり) です。2017年1月から美術教育センターの助手として、教職課程や情報系の授業をメインにサポートをしています。withコロナになってから生活様式が色々と変わり、その場にいなくても情報共有や相手と通じることが容易な時代となりました。賢い頭脳のロボットやAIも私たちの生活の身近なところまで来ましたが、最終的にそれらの結果を選択したり判断するのはヒトだと思っています。便利なものは取り入れつつも、ヒトとして生まれてきたからには、今こそ五感のセンサーを研ぎ澄ませ、その場にはいないと味わえない空気感や感覚、匂いや味、感動をたくさん味わってほしいと思います。皆さんの大学生活が有意義で爽やかなあるトキになるように応援しています。



日野沙耶 (ひの さや) です。専門は日本画で、制作や材料・技法史の研究を行っています。昨年度、有難いことに個展の機会をいただき、久しぶりに制作に打ち込みました。狭い自宅で何とか作品を仕上げ、大きな会場へ展示をしました。小さな作品も、並べて展示をすれば一つの大きな空間となり、絵画の世界が外へ広がっていく感覚が面白く感じられました。これまで絵画とは、その画中に世界を作り上げるもの、という認識がありましたが、空間芸術にもなりうるのだということを実感できたように思います。長く美術と関わってきても、まだまだ発見があります。学生の皆様には、固定観念にとらわれず、柔軟に知識や経験を吸収して、楽しんで美術に関わってほしいと思っています。



竹本悠太郎 (たけもと ゆうたろう) です。兵庫県三木市出身です。彫刻の制作と研究を専門にしています。この4月から助手になりました。よろしくお願ひします。3月まで計10年間、学生として大学で過ごしました。入学したときには、10年間も大学に通うとは少しも思っていなかった。制作と研究を続けていたらいつの間にか、というのが正直なところ。この先、みなさんにも様々な人やモノとの出会いがあるはず。あまり先のことを考えすぎず、何かに少しでも興味を惹かれたときは、その興味関心に素直になってみてください。時間を忘れて夢中になれることをひとつも持っている人は、魅力的だと思います。制作して勉強して、大学生活を存分に満喫してください。